

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八

《第三次世界大戦へのプロローグ?》

NHKの爆笑問題サ・リアル・ボイスのドイツのレストランでの収録で「(略)ウクライナ支援でドイツは既に戦争に巻き込まれている。第一次第二次世界大戦の教訓が如何に生かされ、第三次世界大戦を引き起さない様に現代人の知恵で解決しなければならぬ」とお客の意見がありました。弊誌2022年7月247号の今小路覚真さんの寄稿文に「(略)日本の戦前と、戦中と、ロシアの今が重なるのでは?」と掲載されています。平和の象徴であった北欧二国は中立を解きNATO加盟を進め軍備拡張へ歩み出しました。ロシアは米国や西欧に制裁を科されている国をまとめ敵対主義を露わにしています。そこに同じ覇権主義の中国や北朝鮮とイラクやや違いはありますがトルコやインド、発展途上国も追随?して来ている。世界平和は人智では成し得ないのでしょうか?

京都国立近代美術館

1月28日〜4月16日

《リュイユ フィンランドのテキスタイル》

リュイユはフィンランドのアイデンティティが表れた織物だと言われます。「やわらかな色面」を感じさせるリュイユの一番の魅力は複雑に構成された色彩の表現にあります。

16世紀には既に寝具として用いられていたリュイユは現在、「フィンランド・デザイン」として国際的に高い評価を受け、造形や素材は多様化して表現の幅はより広がりを見せています。その歴史はいわば近代以降のテキスタイル・アートの変遷を凝縮した物語なのです。

本展ではリュイユのコレクションとして著名なトウオマス・ソパネン・コレクションを日本で初めて紹介します。リュイユの歴史を概観できる重要な作品を厳選し、主に1950年代以降に制作された作品約40点を展観します。

《サッカー観戦》

常楽臺住職 今小路覚真

テレビは連日サッカーで賑やかなことです。それぞれ別の国のユニホームは、その違いを見ているだけで楽しいです。日本は「サムライブルー」で、選手はもちろんのこと、サポーターと云われる応援する人達も同じ色のユニホームを身に着けています。日本で応援している人達も、ユニホームは着ていなくても手にしている風船のたつき棒もやはり紺色を中心になっています。しかし不思議な光景は、監督の服装です。監督だけはユニホーム姿ではなく、スーツにネクタイです。野球などは、選手も監督も同じユニホーム姿です。なぜサッカーの監督は選手と違う服装なのか、テレビ画面を見て不思議に感じました。たしかアメリカンフットボールも監督はユニホーム姿ではありませぬ。そこに深い意味があるのでしょうが、わたしには理解が及びませぬ。

《ワインの歴史と特異性》

イタシヨク 福村直

ワインの歴史は8000年ほど前から始まったと言われており、実は人類が手にした初めての酒類と言われています。お酒を造るのに絶対必要な3つの要素があります。まず酒は飲み物なので水分、そしてアルコールに変換させる糖分、アルコール発酵をさせる酵母となります。

そしてブドウはこの3つを全て兼ね備えた唯一の原料となり、難しい作業を必要とさせません。例えばビールの原料の麦なら水分でふやかしてから酵母を加える。日本酒なら米の澱粉を麹で醸して糖分に変えてから酵母を加えるなど手間がかかります。

乱暴ですがブドウはカメの中に入れておけば、酒に変化させることができるのです。文字さえ発明されておらず技術や知識が無かった原始時代でも、他のアルコール飲料と比べこうした簡単な製法で造ることが出来たのです。そして文明の進化と共にワインも品質が向上し、現在でも人々を魅了しています。

季節の家庭料理

田村真紀

《一月 塩麴スペアリブと根菜の煮込み》
作り方約四人分
豚スペアリブ(ぶつ切り)六百グラム・大根四百グラム・蓮根三百グラム・塩麴大匙二・生姜薄切り一かけ分・水適量・醤油大匙二・サラダ油大匙二
スペアリブは所々フォークを刺して穴をあけ、塩麴を揉みこみポリ袋に入れ冷蔵庫に一日置く。大根と蓮根は皮を剥き、大きめの乱切りにする。フライパンに油大匙一を加えて中火で熱し、スペアリブを焼き全体に焼き色がついたら厚手の鍋に移す。フライパンの余分な脂を拭き取り、残りの油を熱し大根と蓮根を中火でじっくり炒め鍋に加える。鍋にひたひたの水を加えて強火にかけて煮立ったら火を弱めて灰汁を丁寧に取り除く。生姜を加え蓋をし弱火で一時間ほど煮て醤油で調味する。

つれづれの記

山崎辰巳

《ドローンと洞察力》

映画やテレビ、CMで、ドローンを使った映像を見かける機会が増えました。この秋に地元紙のトッパンを飾った有名寺院の紅葉も中空のアンクルからドローンで写された夜景で、鮮やかな色彩に染められ、見事な景観が再現されていました。

たしかにドローンの出現は、これまで足を踏み入れることが難しかった場所や事物の確認を可能にし、肉眼で認識するのが困難だった知的好奇心の充足を容易にしました。

ただこの先、いくらドローンの開発が伸展しても、ただひとつ「人間の心」の領域にはドローンの入り込む余地はないと思います。人の心は移ろいやすく、しかも肉眼で確認できない厄介な生きもの。そんな心や時代を的確に察知する能力、「洞察力」をフル回転して、新しい年に向き合いたいものです。